

W. E. グリフィスの主要著作 *The Mikado's Empire* (1876 明治九年) が米国で出版されたのは、彼の福井生活から五年後、大政奉還の九年後でした。この本の後半は『明治日本体験記』(山下英一訳)として公刊されています。では前半は・・・日本史です。神話の時代から、彼の同時代まで。すなわち、第一部の最終章は維新の原因と展開を叙述した「最近の日本における革命について」です。その文章を紹介します。

○江戸湾におけるペリーは、時ならぬ雪解けをもたらす、二月の熱い南風のよ
うなものであったろうか。

革命を洪水に例えるグリフィスは、革命思想を抱く者たちにとって旧体制のもとで生きる日々は「永遠の不満の冬」であったとし、その雪解け水が shogunate ショーゲン体制、および封建制を押し流し、「ミカドの方舟は権力の座に漂着した」と、牧師らしい表現をしています。

○日本の封建制は、それが廃されるずっと前から、その墓が準備されていた。

倒された旧体制をグリフィスは dual system (二元統治) と呼びます。ミカドとショーゲン、二人の君主がいる体制です。徳川時代、実質上の皇帝はショーゲンの方でしたが、ミカドこそが、そしてミカドだけが真の皇帝だという思想もありました。そうしたミカド本来の地位を回復せねばならないという「運動の起源は、今からさかのぼること一世紀半前の時代にある」、つまり十八世紀前半には維新思想が準備されたとグリフィスは語ります。

○守るべき永遠の安定と平和。それは家康の苦勞の多い人生の苦勞が生んだ実りだった。

グリフィスは、徳川の平和を守る手段として家康の後継者たちが歴史的欺瞞を蔓延させたのみならず、外交において幕府が用いた称号「大君 tai-kun」もそのひとつで、これは本来ミカドのことだと書きます。

○二世紀にわたる長い平和は、まじめな愛国者たちに考える時間を与えた。

真剣な学徒の燃える眼差しの先で、ミカドは古代の権威を回復した。

サムライたちが古い歴史と儒学を学び、儒学の徳である「君臣の別」に従う時、歴史的に真の君主であるミカドの前では徳川家もまた権力の篡奪者とみなされます。「この動機のみが革命を、やがてそれが起こるべき時に、ひき起こしたのだ」。

○彼が生きていたならば疑いなく1868年の革命運動の指導者となっただろう。

グリフィスは来日前、薩摩藩が留学させた多くのサムライたちと友人になりました。先見の明をもった 薩摩侯(島津斉彬)「以外の誰が、これほどの弟子たちを後に残せただろうか」。「その中で最も頼りにされた信念の人」として、彼は「西郷、大久保、そして勝」の名を挙げます。勝海舟も彼の友人でした。

○越前侯が首相になったのは…前例がなく特別だった。…大名たちに江戸

居住を強制する仕来りの廃止…江戸の栄華は夢覚めるがごとく消えかき…

グリフィスは、彼を日本に招いた松平春嶽とも友人になりました。大政奉還の五年前、幕府政治総裁となった春嶽の政権による諸侯参勤の緩和措置は、幕府の求心力低下と、政治の中心が京都に移る決定的なターニングポイントになりました。「彼らは自分自身、でなければ宮廷の命に従って行動するようになった」。

○平均的日本人の主要な特徴は、移り気なことだと思われる。移り気を人格

化したのがケイキ(慶喜)だ、と彼のかつての親友たちは言う。

その知性と人品が諸外国の使節を魅了した最後のショーゲン Keiki。春嶽たちを振り回した彼の君子豹変も、鳥羽伏見後の新政府への恭順によって終わりました。「揺れ動く者は、もはや揺れなかった。彼の政治における最後の、最良の決断は」グリフィスによれば「勝と大久保(一翁)に負うもの」でした。

○日本人を諸国民の礼讓ある社会に参加せしめたものは、内側からの衝動なのだ。

「外敵を打ち払い、商港を閉ざし、専制的孤立の日々に帰る見通しを」もっていたのは革命勢力で、「外国文明を熱望する者たちは、むしろ徳川の側だった」ことをグリフィスは知っていました。維新後、公家や攘夷派が「夢見た理想の精神を逆転させ」、「かつては畜生と思っていた連中を友人とした」のはなぜか。当時外国人の間で一般的に連想された、外国の軍事力や通商の利益といった「外側からの衝撃」は「目から鱗が落ちる」上で、「あくまでも手助け」をしたに過ぎない、というのがグリフィスの最大の主張です。「日本人は自分が間違っているとか劣っているとか認めた時、よりよい者に自ら進んで変わろうとする。それは彼らの最も優れた資質だ」。

○あの崇高なる瞬間、東洋の専制政治の首長たる者の口から、このような言葉がこぼれたということに、我々は好意的感嘆を引き起こされる。

東洋といえば停滞した世界であり、独創的發展を語るべき歴史などない、という偏見が当時の西洋においては普通でした。五箇条の御誓文の崇高な「響きは、新たな、そして高等な国民の發展、それがアジアの一国にも可能だと、人間性における最も強い信条において信ずる者たちのみ成し得る發展の、歎ばしき先触れのような」とグリフィスは書いています。

○西洋の考えに、その原文にふさわしい日本語の着物を彼は着せた。

グリフィス自身が特別に外国人メンバーとなった、明治初期知識人たちの結社「明六社」。その中心人物が彼、福澤諭吉でした。彼らこそが「ミカド主義者を啓蒙するという大仕事」を完成させたのだ、そうグリフィスは強く主張します。「帝国の主導的人物に混じって、四年近く日本で生活した筆者は信じて揺らぐことがない。日本語で出版された本を読み、学ぶ、それこそが、日本人の心の変化、近代文明を志向する衝動の發達において、他のいかなる理由・因果にもまして大きくはたらいたものであることを」。

○筆者の人生における最も印象的な経験のひとつとなった光景がある。福井にある城の大広間、そこで越前の大名が彼の二本差しの家来三千人に別れを告げた。

グリフィスが日本全史を叙述した原点。それは明新館理化学教師として経験した廃藩置県でした。「それが存在する限り国家の発展と平和に保障がないということが、日に日に確かになったのが封建制度だった。それが育てた諸藩の精神、家中意識は国家の統一にとって致命的だった。日本人が「私の国」と言う時、それが単に彼自身の藩を意味する限り、そこに忠誠心はあっても愛国心はない。行動の機は熟したようだった」。

○彼らはショーグンに対し立ち上がり、打倒し、私的生活に追いやり、今度は自分たちの主君である大名たちに対して、同じことを強いた。

「各藩における真の権力は、(藩主)より低い地位にある有能な者たちの手中にあって、彼らが自分の主君を支配していた。この彼らこそが、現在の日本政府を構成している人物たちなのだ・・・政権は交替したのではなく、移行したのだ。そして新しい機構を動かし、新しい仕事をしてみせている」。

○ショーグン、幕府、おそらくは封建制もだが、たとえ外国人の上陸がなかったとしても、みな倒れただろう。

「日本史の全てを通して、ミカドその人および玉座に対する尊敬の念は、国民的特質として最も強固なものであり、政治的効力として最も強大なものだった」。それが維新の原因でもあり手段でもあったとグリフィスが語る時、彼は、日本には日本の歴史があり、日本人には日本人の国民的特質がある、それを学んで初めて現在の現象が理解できるのだと、外国の読者に説いているのです。同時に、日本はこの革命と同様に近代化もまた、「自らの動機」で行っているのであって、自分たち西洋諸国と同じ人間として、日本を国際社会は受け入れるべきだ、というメッセージでもあります。1871年3月6日、米国連邦議会の議場で岩倉使節団が歓迎された日をもって、グリフィスは章を閉じます。「この日、日本は世界史の舞台に、正式にその第一歩を印したのだ」と。

最終章全文、当館 HP 内「建物と展示」→「ガイド資料」よりダウンロードできます。

【解説】

グリフィスの維新観は、一言で言えば、日本の真の君主(ミカド)が、篡奪者(ショウグン)の手から権力を取り戻したということです。この著作は篡奪される前の建国期と、篡奪の過程の時代を描いているわけで、徳川が篡奪の完成者となります。

この物語は、彼の日本史理解にとって最も信頼できる情報源だった英国人外交官に大きな影響を受けています。「アーネスト・サトウ氏、彼こそ日本歴史研究の第一人者である」。そう序文でグリフィスが紹介している人物こそ、類まれな語学力と行動力で幕末の英国外交を支えた、維新の証人でした。英国にとって、誤魔化しと時間稼ぎに汲々とする幕府との交渉過程は、その背後にある政治システム、日本の真の君主を発見する道程でした。「幕府にだまされた」という感覚を出発点として、サトウは薩摩・長州などミカドを中心とした新たな政府の樹立を目指す諸藩のサムライたちと良好な関係を結びます。窮する幕府に手を差し伸べることで影響力拡大を図るフランス外交団と対照的に、英国は日本人の権力闘争に中立の姿勢を保ち、外交の相手とするに足る一元的責任政府の確立を待ちました。一方で、サトウが公表した幕府を否定する論説は和訳され、彼自身革命の推移に影響を与えました。グリフィスの論調が終始革命勢力の側にあるのは、幕末外交史の帰結といえます。

ただし、彼がサトウの情報に真実の物語を見出したのは、彼自身の実体験にあります。すなわち福井で廃藩の瞬間に立ち会い、東京で旧幕府の知識人たちと交流することで、彼は日本人の歴史意識と学問を理解し、日本人が主人公の日本の歴史の、同時代における展開として維新を捉えました。それによりサトウの革命談と研究を消化し、一冊の歴史書を叙述する意志と能力を得たのです。グリフィス自身、この本は「目撃者がそれを目にした時に感じたものによって書かれている・レトリックが元気いっぱいになり、感情が白熱しているのは明らかだが、それは著者自身が力強いドラマの役者たちを直接に知っていて、彼らとともに感じ、ともに働き、まさにその歴史の瞬間に覆うべくもない共感と輝かしい希望をもって得た見通しと思想によって、そのページが書かれているからである」と認めています。また、維新の原動力は儒学・国学など知性の力だったという主張は、新たな知性による日本の近代化を信じ、自らも力を尽くしたグリフィスにふさわしいものです。